現（うつつ）の、街で。

—江　弘毅

Q—今度、雑誌の特集でレストランをやろうと思ってんだけど、あまり売れないんじゃない、みたいな感じで言われてる。

A—レストランって、フランス料理やらイタリア料理やらの。

Q—そう。やっとゴージャスやら流行りやらでワーっといっていたのが終わって、今、状況として、とても値打ちのあるごはんが食べられるようになった、と。あの時代にたっぷりワインやら料理やらの勉強もしたしね。何よりも時代がどうであれみんなでおいしいものを食べるのは楽しい。

A—わかります。けど、今はもつ鍋の時代ですよ。日経トレンディか何かに載ってたけど、この数カ月で東京にもつ鍋専門が200軒以上出来たって。やっぱり安いのが一番だって。

Q—そりゃ当然そうです。安くて旨くて腹ふくれる。でも、もつ鍋はもつ鍋だし、てっちりはてっちりだ。フランス料理ともつ鍋の楽しみを一緒にすることはできないと思う。それが一番のポイントですよ。リッチな気分とか他人よりも俺はレベルが高い、とかじゃなくて。結局、フランス料理＝キンタマがでかい、それでキンタマがでかいのが、もう恥ずかしい、みたいな時代ですよね、今は。でもカネないなりに、本当はきっとあるんだけど、みんなでしっかりしたメシを楽しく食べたい、という切実な欲求は、とくに今の時代にあるんじゃない。

A—政治やら経済やら、自分の財布やらもひっくるめて、何かこう暗いというか。だから、食べることぐらいはしっかりと楽しみたい。それは分かる。でも気分がそうならない。

Q—それだったらティラミスと同じじゃない。流行りすたりの中でしか何も消費されない。ファッションの世界でなら、よく分かるんだけど、イタリア料理にしたって、やっぱり本質は楽しく食べられるモノや方法論にあると思う。確かにイタリア料理のシェフになるのがお洒落みたいなのはあったけれど。

A—そんなこと言ってんじゃないよ。外へ出て派手に食べるのが今はやってられないというか、何かひっかかってしまう。

Q—そしたらもつ鍋はどうなの。

A—決定的に安いじゃない。1人3,000円でOK。

Q—何を言ってんだ、安けりゃいい、みたいなこともう意味がないよ。全部嘘だよ、ただ単純にブームなだけ。結局、みんなが金持ちみたいな数年前の卑しい消費とは何ら変わらない。それを高いと思うか、安いと思うかということをみんな考え出したんじゃないの。だから服で言ったらギャップなんじゃないの、現在のところ。

A—でも安いにこしたことはない、という真実はあります。

Q—そんなあたりまえのこと主張してたらダメだよ。結局、高度成長の頃とおんなじ指向性だよ。カネやら冷蔵庫やらテレビやら、持ちました。それから'90年代になって、海外旅行行きました、ブランド品の服も買いました。それでどうなの、やっぱり貧しいままじゃない。

A—貧しくなんてないよ。いっぱいもって、便利なのは事実なんだから。だから今、安いもの本当に意味のあるものに注目している。

Q—違う。そもそもいっぱい持ってる、ということ自体、何にもならないということだ。生活すること、街で生きていくことを楽しむということは、いっぱい持つ、というのとは違うでしょ。いっぱい遣う、というのはやっぱり楽しいことだと思うけど、それと違うのは、主体の問題だよ。ベルサーチ着たって誰も「格好いい」と言ってくれなかったら悲しいでしょ。持ってることと食べたりして楽しむこと、すなわち遣うことは全く別の世界なんだよ。

（プロフィール）江　弘毅はじつによく生きている。ポジティブだから、人が好きだから、彼は出会うすべての人間、モノ、現象の胸ぐらをつかみ揺する。私も7年ほど前に初めて彼と会った時には泣かされそうになった。その後も何度か泣かされたが彼も何度か泣いていた。彼は今、『ミーツリージョナル』で街を現を揺すり続けている。彼が泣きながら揺すり続けている限り、かけ値なしの連中が彼を慕い、彼の仕事を欲求しているのだろう。記号じゃなくワケを知ろうとする彼は正味で恰好ええ男である。（バッキー・イノウエ）

修ちゃんの珍獣総進撃

—和泉　修

今回の吉本楽屋話は、ラジオなどをやっているときに一番多い質問、どうしたら吉本興業に入れますか？これについて答えながら小ネタも交えて書いていきたいと思います。まず入り方としては、大きく2通りに分かれます。ひとつは芸人さんの弟子になって修行する方法。

もうひとつはNSC（吉本芸能学院）に入学して卒業してから入る方法。今一番多いのは、後者のNSCからです。ここの出身には第一期生でダウンタウン、トミーズ、ハイヒール。若手では、ベイブルース、トゥナイト、雨上がり決死隊、藤原、バッファロー吾郎など、たくさんいます。さてこのNSCでは、一年間何をするかというと、学費をはらって、週一回の発声、ダンス、漫才、コント、芝居の勉強をするのですが、その一年間で、相方を見つけて漫才をするのか、一人でコントをするのか自分たちで決めなければなりません。今のNSCの状況も、入学時には二〇〇人ぐらいいるらしいのですが、卒業していくのは30名ぐらいで、世間に名前が出るようになるのは、毎年、5組ぐらいでしょう。したがってNSCに入れば、かならず吉本のタレントになれるというわけではないのです。そしてもうひとつの、弟子になる方法ですが、確率でいけばこちらの方が高いでしょう。しかしはっきり言って、キツイです。NSCは授業という形で、いろんなことを勉強できますが、弟子は、自分で師匠に付きながら、勉強していかなければなりません。それに、礼儀は師匠からうるさく言われ、カバンや衣装も持たなくてはいけないし、お茶をだしたり出前をとりに行ったり、肉体的には重労働です。ましてそれを2年間ですからたいへんです。しかし利点もたくさんあります。まず他の芸人さんに顔を覚えられるし、かわいがってもらえます。それに師匠と実際にいろんな所に行くので、テレビ局やラジオ局の人にもかわいがられます。そして毎日、師匠から昼メシ代として、千円もらえるわけですから、食いっぱぐれはないでしょう。クビにさえならなければ。ベテランの芸人さんは、みんなこの方法で吉本に入っています。そして不思議なことに、師匠が落語家なら弟子も落語家、というわけではないのです。漫才師の師匠はみんな漫才師かというと、これも違います。たとえばオール巨人さん。巨人さんの師匠は、なんと新喜劇の岡八郎さんですし、きびのだんごは、師匠が八方さんなのに漫才をやっているし、何が自分の道かを選ぶのは自由なのです。弟子出身の若手といえばジミー大西さん、おかけんた・ゆうたさんがそうです。そして今、第3の入り方が増えています。それはオーディションという形です。僕が梅田花月シアターでやったミュージカルも他のメンバーは、オーディションで選ばれた人たちだし、圭修も、二丁目劇場の素人オーディション番組からの出身ですし、他にまるむし、非常階段、ぜんじろうなどもいます。こうして考えると入る方法はたくさんあるし、簡単に入れます。しかし入ってからが勝負で、入ることだけで満足した人で活躍した人は一人もいません。そこのところを、今、吉本に入りたいと思っている人はよく考えて下さい。今回はマジに書いてしまいました。来月からまたおもしろい話を書くから期待してネー

（プロフィール）本名・釘田修吾。1962年生まれ。同志社大学文学部卒。吉本興業所属。1985年5月、漫才コンビ圭修としてデビュー。今宮戎新人漫才コンクール受賞、上方お笑い大賞銀賞受賞、花王名人大賞新人賞受賞等、受賞多数。学生時代にはボクシングで活躍し、高校フェザー級チャンピオン（昭和55年）に輝く。また、カバディー第一回社会人大会優勝。ドッチボールは関西一と豪語する。通称吉本一のスポーツばか。現在は、ラジオ・TVのパーソナリティー、レポーター、司会等、ソロでも活躍中。唄って、踊って、ギャグれる、プロボクサーである。